

1 学校紹介

本校は習志野市南東部の埋め立て地に1969年に創立した小学校である。現在、児童数270人、学級数は11クラス。「地域の風がいきかい、学校の風が行きかう学校づくり」を掲げ、地域ボランティアによるお話会、和太鼓演奏等を実施してきた。

平成30年度にはキャッチフレーズ「未来へ輝け！笑顔あふれる東小」のもと、創立50周年を迎えた。30年以上の長きにわたり、文学の読みを中心とした国語科研究に取り組んできた。

2 研究主題

「豊かな読解力を育てる指導のあり方」
～文学教材の読みの交流を通して～

3 研究の概要

(1) 児童生徒の実態と課題

令和元年度の国語科公開研究会では、「教師自身が一人の読み手として文学教材を読み味わうこと」を研究の基盤に置き、自分の読みと他者の読みを比較する「読みの交流」に焦点を当てた研究を発表した。特に、本校における「発表・交流のすすめ」として、「理由」「例示」等の13の分類と「具体的な話し方」を示す掲示物を校内に掲示し、児童の交流場面に積極的に活用してきた。また、並行読書を重視し、関連図書を集めて読めるような環境作りや短作文の指導にも注力している。

令和3年度全国学力・学習状況調査では、全国平均と比べ、文章の構成や展開を考える問題は平均を大きく上まわっていたが、「書くこと」で、指定された長さの文章で書くことや、段落の意味から二段落に分けて書くこと等に課題が残った。

(2) 学力向上のための取組

ア 実践プログラムに沿った検証授業の実施（令和3年12月10日）

- ・単元名：物語の全体像をとらえ、やま場の場面を見つけて読もう
- ・展開学年：5年1組・2組
- ・学習材：「大造じいさんとがん」（教科書教材）
「片耳の大シカ」「アルプスの猛犬」「金色の川」「月の輪ぐま」
「母ぐま子ぐま」
- ・単元計画（全10時間扱い）

学習指導過程を、「『思考し、表現する力』を高める実践プログラム」の「見いだす」「自分で取り組む」「広げ深める」「まとめあげる」のサイクルにあてはめて計画した。

次	学 習 内 容
一	見いだす ○学習のねらいや進め方をつかみ、学習の見通しをもつ。 ・単元のめあてである「やま場」について辞書で調べて確認する。

	<ul style="list-style-type: none"> ・2・3回読んだ初読の段階でやま場を自分なりに考えて書く。 ○並行読書のきっかけとして学校司書のブックトークを聞く。 (※椋鳩十作品コーナーには46冊の本を用意)
二	<p>自分で取り組む</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「心情が大きく変化するところがやま場」であると共通理解し、場面ごとに大造じいさんの心情を中心に読み取る。 ○物語のやま場について話し合う。
三	<p>広げ深める・まとめあげる</p> <ul style="list-style-type: none"> ○授業者が選んだ椋鳩十作品の五冊(※教科書教材と構成が似ていて、やま場のみつけやすい)の中から紹介する本一冊を選び、ポップを作成する。 ○同じ作品を選んだもの同士で、自分の考えるやま場を伝え合う。 ○実際にポップを作り、交流する。 ○交流後の振り返りノートに書く。

(参考：千葉県総合教育センター 「教育コンテンツ・データベース Wakaba」
単元名「立場を変えて書きかえよう」)

イ 授業のまとめに「振り返り」の時間を設定

- 授業者が単元の振り返りをまとめる際のキーワードを板書することで、書くことが苦手な児童もまとめることのできる手立てとした。
- 研究会議にて「振り返り」の意義や方法等について話し合った。

ウ 書くことの日常化

- 文学教材に限らず、説明的な文章や他教科、道徳科等でも書くことを意識的に取り入れるようにし、その実践を研修等で広めた。写真1は、説明的な文章を扱った授業での様子。さけの大きくなる過程を理解し、さらに図鑑やタブレットで調べて新たにわかったことを教科書の画像と照らし合わせて関連するところに、大きめの付箋にわかりやすくまとめて書き、掲示しているところである。
- 行事を体験した後に必ず、感想や手紙等にまとめさせた。



※今年度実施の行事から(一例)

- ・サンタクロース(地域)へのお礼の手紙(1・2年)
- ・消防署見学後のお礼の手紙(3年)
- ・「命の講座」(5年)
- ・「陸上記録会に臨んで」(6年)
- ・千葉交響楽団を招いての演奏会
「学校音楽鑑賞教室を終えて」(全学年)

(写真1 説明文「さけが大きくなるまで」)

エ ICT機器を活用した授業改善

- 年間10回、ICT機器を活用した授業研究を行い、お互いに見合う場とした。よい点、疑問点などを必ず付箋に書いて読み合い、付箋の意見を参考にしつつ、授業者自身が授業の振り返りを書いた。

オ 教師の授業力向上への取組

- 全国学力・学習状況調査、PISAの問題を実際に解き、分析した。
- 国語科の研究雑誌等を回覧し、全職員が目を通し、気になるところや参考になるところに付箋を貼りながら、理論とさまざまな取組を知った。
- 国語科で文学的な文章を扱った単元で全担任が研究授業を行った。(令和3年7月13日)

(3) 加配教員(学習サポーターを含む)の活用

- OJTの機能を生かし、加配教員自作のプリントを各学年で活用した。
- 加配教員による多読へのアイデアを紹介し、実践した。写真3は、斉藤隆介の教科書掲載以外の物語を読んで、心に残ったことを書いて伝え合う「読書で作るモチモチの木」の実践。
- 子どもの読書推進のための準備や選書等を整えた。
- 授業研究の計画立案、実践後のまとめ等を研究主任と相談しながらすすめた。

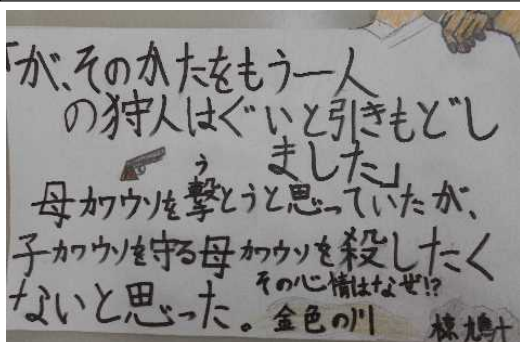
4 成果

ア 『『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』に沿った検証授業の実践により、児童の主体的な学びを引き出すことができた

- 児童が単元の見通しをもって学習に臨めた。
- ポップ作りの本を自から選んで読むことで、根拠を述べながらやま場について議論し、やま場のキーセンテンスを一文で書き、自分の読みを深めた。(写真2)

イ 授業のまとめに「振り返り」の時間を設定したことにより、児童が自らの学びを自覚することができた

重要人物の心の動きや熊のピンチなど、結末が楽しみになりました。物語全体の中で、中心人物の心の動きや行動の変化がやま場がということが分かりました。中心人物の心の変化をとらえて書くことができました。みんな、それぞれいろんな物語の行動の変化をとらえて書くことができました。みんなそれぞれいろんな物語の行動の変化などが聞けて面白かったです。他の本もポップを見たり聞いたりして読んでみたいと思いました。



(単元名：5年「物語の全体像をとらえ、やま場の場面を見つけて読もう」の児童の振り返りより)

振り返りの2・3文目には、やま場がどのようなものであるのかを理解し、自分の作品の評価を書くことができた。最後には学んだことを生かして読書を広げようとする意欲や態度が見える。

(写真2 児童作品の「金色の川」のポップ作品)

○振り返りは、国語科に限らず、各教科で活用することにより、児童の学びの定着につながると言える。

ウ 書くことの日常化を図ることで、書くことへの抵抗を減らし、自分の読みや考えの明確化につながった

次の囲みの記述は、道徳科「モムンとヘーテ」（2年）で、児童が付箋に書いたものである。「友達」について考えたことを、自分の言葉でしっかりと表現し、書くことができた。

<「ごめんね ともだち」より>

オオカミとキツネがけんかしてたのに、ありさんが間に入ってくれたから、なかなかおりができたので、ありさんがやさしいと思いました。

→主人公の周囲への働き（ありさん）に目を向け、自分の意見を書けている。

<「よろしく ともだち」より>

オオカミは、見かけはこわいけど、やさしいことがわかりました。「こわい」って見ためではんだんしちゃいけないとわかりました。

→「見た目で判断しない」ということについての的確に書いている。



(写真3 読書で作るモチモチの木)

その他、加配教員等が提案した、多読のアイデアの活用により、児童の興味が引き出され、斉藤隆介作品の感想付箋が増える毎にカラフルなモチモチの木となった。(写真3)

校内には短作文や感想の掲示物を増やし、児童同士が読み合い、自分の考えを再確認する環境づくりを実践した。

児童に負けないくらい、教師が多読する必要がある。今年度は、国語科を中心とした教育雑誌を多読したり、ホワイトボードを活用して全国学力・学習状況調査やPISAについて、分析したりして、これからの時代を生き抜く児童に必要な言語活用能力等について話し合った。

5 今後の課題

- 単元のはじめにゴールを明確に示すことで、児童の自らの学びを引き出す必要がある。
- 授業者がねらう指導事項と学習材の選択、言語活動の組み合わせを熟考していく。
- 児童の効果的な振り返りの仕方について、継続して研究していく。
- 児童の学びをどのように見取っていくか。具体的な見取り方について、お互いの実践を重ねて見出していく。